特集
選挙の風景

メキシコのこども選挙

馬場 香織

民主主義への移行期以来、メキシコで目にする変わった選挙の風景のひとつが「こども選挙」（Consulta Infantil y Juvenil。一九九七年のみ Elecciones Infantiles）である。こどもたちがつま先立ちになってカラフルな投票箱に票を入れる様子は微笑ましく、権威主義時代を知る国民には民主主義の大きな前進にも映るはずだ。しかし、その牧歌的な風景とは裏腹に、「選挙結果」が浮き彫りにするメキシコ社会の現実は厳しい。本稿では、メキシコ政治と選挙の関係と、こども選挙の展開について簡単に紹介したい。

●現代メキシコ政治と選挙

二〇世紀のメキシコ政治史は選挙をめぐる歴史とも読める。かつて、政治学者サルトーリの分類で「ヘゲモニー政党制」の代表例とされたメキシコでは、一九二九年にその前身が創設された制度的革命党（ＰＲＩ）が、二〇〇〇年の政権交代まで七一年間政権を担い、権威主義的統治を行った。文字どおりの一党独裁とは異なり、反対派の存在がある程度認められるヘゲモニー政党型のＰＲＩ権威主義体制では、体制維持の装置として選挙が重要な役割を果たした。ただしそれは、民主主義体制下で国民の代表を選出するという意味においてではなく、体制に正統性を付与し、対外的には民主主義の体裁をアピールする機能によってであった。ＰＲＩ体制下の選挙では、ＰＲＩの勝利が選挙前からいつも約束されていたし、ＰＲＩの大統領選候補者は毎回八〇～九〇％台という信じがたい高得票率で勝利を収めてきた。こうした選挙における政権党の圧倒的な強さは、政府に従属する選挙管理委員会や、ＰＲＩのお家芸たる、バラエティ豊かな選挙不正・票の買収によっても支えられたものであり、ＰＲＩ体制下の選挙は当然ながら自由でも公正でもなかった。

以上のようなＰＲＩ体制の特色から導かれる形で、メキシコでは権威主義体制からの民主化もまた選挙が鍵となった。というのも、ＰＲＩ体制下で少なくとも形式上は、複数政党による定期的な選挙が実施されていたため、民主化とは――比較的長い年月をかけて――選挙を自由・公正で競争的なものに整えていくプロセスに他ならなかったからである。一九八八年の大統領選で大規模な選挙不正が疑われつつＰＲＩが辛勝すると、それまで以上に選挙関連の法改正が進み、一九九七年の時点で民主的な選挙の基盤がほぼ整ったといわれている。この年にＰＲＩは史上初めて下院で過半数議席を失い、二〇〇〇年大統領選での反対派の勝利によって政権交代が実現して、メキシコは民主化を達成したのだった。

●小さな有権者たち

民主的な選挙制度作りに向けた改革が進むなか、市民教育の一環として始まったのがこども選挙である。ラテンアメリカではすでにこども選挙の試みがみられた国もあったが、メキシコで初めて実施されたのは一九九七年のことで、一九九〇年代の一連の改革によって政府から自律的な組織となった



こども選挙の投票所の様子（メキシコ市、2012 年筆者撮影）

連邦選挙管理委員会（以下、連邦選管）と、ユニセフの協力の下で実現した。こども選挙が掲げる目標には大きく二つがある。ひとつは、メキシコの民主主義の将来を担うこどもたちとその親世代に、民主的な選挙と市民参加の文化を広め、根付かせること。もうひとつは、政府・政党にこどもたちの声を届け、政策に反映させるよう促すことだった。


投票するこども（メキシコ市、2012 年筆者撮影）

こども選挙は一九九七年以来、連邦選挙の年に合わせて三年ごとに、連邦選挙と同日かそれ以前にメキシコ全土で実施されている。日程については連邦選管内で意見が割れており、同理事会で毎回審議のうえ、決定されている。二〇一五年のこども選挙は連邦下院選と同日に行われ、六歳から一七歳までの二六七万七〇〇〇人が投票した。こども選挙の投票所は、住宅地近くの路上や学校、ショッピングセンターなど、こどもがアクセスしやすいさまざまな場所に設置される。

こども選挙とは、実際のところ全国規模のアンケート調査で、こどもたちは年齢に応じた質問票（ただし、質問の主題は同じ）に回答を記入し、投票する。二〇一二年からは五歳以下の幼児も、「わたしの住んでいるところ」のようなお題に沿った絵を自由に描いて投票に参加することができるようになった。一五～二〇問程度の質問票の内容は、家族や学校、地域社会に関するものなど多岐にわたるが、連邦選管のそのときどきの理事たちの意向を強く反映するため、必ずしも継続性はない。また、治安についての質問が目立った二〇一二年のように、世相を反映した質問が盛り込まれるケースもある一方で、二〇一五年の場合は、連邦選管が主催した成人向けの直近の世論調査に準じる内容が、質問の主要な部分を占めた。こども選挙の結果は連邦選管のホームページで公開されるほか、専門家によって詳しい分析が行われ、その報告書も一般に公開されている。

●こどもを取り巻くメキシコ社会の現実

このように、メキシコの選挙の風景として定着してきたこども選挙だが、近年の選挙結果から浮かび上がる現実は厳しいものである。二〇一二年のこども選挙では、麻薬をめぐる暴力に関する質問項目が注目を集めた。「わたしが住んでいるところでは銃撃戦があり、死者が出ている」という項目に「はい」と答えた人の割合は、六歳から一五歳までの回答者全体の約二四％にのぼり、もっとも多かった一五歳では三三・五％に達した。実に三人に一人が、近所で銃弾が飛び交う環境に暮らしている状況が示唆される。全国平均を超えたのは、チワワ州をはじめ、麻薬関連の治安の悪化が懸念される北部諸州であった。また、一五歳の回答者のうち三〇・五％が「近所で麻薬を勧められたことがある」と答え、一三・九％が「犯罪組織からその一員となるようにいわれたことがある」と回答している。

一方、二〇一五年のこども選挙では、年齢が上がるにつれて軍や行政への不信感が強まるという結果が注目に価する。軍、警察、政府を信頼すると答えた人の割合が、一〇～一三歳ではそれぞれ七三・九％、七一・五％、四四・一％だったのに対し、一四～一七歳では二五・二％、二一・七％、五・二％ときわめて低い。後者は、先述の成人向け世論調査の結果と比較しても低い信頼度という結果であった。

●おわりに

民主化以後も、選挙をめぐるさまざまな問題が日常的に紙面を賑わせているメキシコで、こども選挙を将来の民主主義への希望とみるのは楽天的に過ぎる。他方で、こども選挙の結果は、彼らを取り巻く厳しい現実を大人たちに突きつけるものである。権威主義体制下の選挙がそうであったように、こども選挙を民主主義の進歩をアピールする「飾り」に貶めるのではなく、大人たちがこどもたちの声と真摯に向き合うこと。この国の民主主義の将来は、そこにかかっているのかもしれない。

（ばば　かおり／アジア経済研究所　ラテンアメリカ研究グループ）